

# 幸府画報

第 8 号

2021 年 9 月  
(令和 3 年)

発行  
太宰府市教育委員会  
文化財課



バックナンバーはこちらから

## 調査見聞

### 太宰府の絵師資料

#### 絵画の市指定文化財第一号〜齋藤家資料

平成 26 年（2014）度に太宰府絵師調査が始まり、最初に取り組んだ齋藤家資料は、平成 30 年度の報告書刊行後、絵画ジャンルとして最初の太宰府市の指定文化財となりました。総数 1408 件の齋藤家資料の中心をなすのは 1253 件にのぼる画稿類です。画稿とは本画制作の参考とするための下絵や模本などの総称で、江戸時代当時は「粉本」や「絵（手）本」と呼ばれていました。

#### 粉本の実例〜焼筆の痕跡

齋藤家資料には、紙の表や裏に焼筆の跡が認められるものが 265 件含まれていま



図 1 《大日如来図》齋藤家資料



図 2 《仏尊像型紙》  
(大英博物館所蔵 Stein73.2)  
※ CC BY-NC-SA 4.0 の下に提供されています。

#### 粉本の歴史から

粉本の歴史を振り返ってみると、古い例として、10 世紀の敦煌資料中の仏像の型紙があります。「仏尊像型紙」（図 2）は特殊な紙に墨線と針孔線で仏像の図柄が描かれ、これを石窟の壁に当て、針孔の上から粉をなすりつけて使用したと考えられます。日本でも奈良の法隆寺金堂や大分の富貴寺大堂などの壁面に凹線が認められ、下絵を壁面に貼り籠の類でなぞって描いた、つまり粉本を用いた「ねん紙」の技法が使用されたと推定されます。

#### 粉本の歴史

平安時代以降盛んに描かれた仏画に関わる粉本も残されています。江戸時代最大の画派であった狩野派は、粉本の模写を絵画学習に不可欠な行為と位置づけており、これは他の流派にも共通していました。当然ながら近世以降の粉本の総数は膨大なはずですが、たとえば木挽町狩野家資料約 5000 件（東京国立博物館所蔵）、大和絵の流派の土佐派絵画資料約 2000 点（京都市立芸術大学所蔵）が確認されています。また全国諸藩の御用絵師の粉本は、各地に伝えられ、個別に調査・研究・展示がなされています。しかしそれら粉本のうち総合調査を経た報告書が刊行されたのは、尾形家（福岡藩）、梅田家（加賀藩）、三谷家（久留米藩）など、限定されています。このような中で齋藤家資料の報告書刊行はまさに快挙といえます。

#### 粉本の大群からのメッセージ

本画は完成後に注文者の元に分散するため、現在では確認できなくなっている場合も多いのですが、粉本はすべて絵師の手に残ります。大群としての粉本は、当時の絵師活動を総合的に語ってくれるメッセジジャーといえます。諸藩ではなく、江戸や上方でもない地方都市の太宰府において、近世から近代への時代の変革期に豊かな文化活動が繰り広げられていたことを、太宰府の絵師三家（齋藤家・吉嗣家・菅島家）に伝わる大群の粉本は語ってくれるはずですが、

（小林知美・筑紫女学園大学）

#### 粉本の調査と報告書

平安時代以降盛んに描かれた仏画に関わる粉本も残されています。

江戸時代最大の画派であった狩野派は、粉本の模写を絵画学習に不可欠な行為と位置づけており、これは他の流派にも共通していました。当然ながら近世以降の粉本の総数は膨大なはずですが、たとえば木挽町狩野家資料約 5000 件（東京国立博物館所蔵）、大和絵の流派の土佐派絵画資料約 2000 点（京都市立芸術大学所蔵）が確認されています。また全国諸藩の御用絵師の粉本は、各地に伝えられ、個別に調査・研究・展示がなされています。しかしそれら粉本のうち総合調査を経た報告書が刊行されたのは、尾形家（福岡藩）、梅田家（加賀藩）、三谷家（久留米藩）など、限定されています。このような中で齋藤家資料の報告書刊行はまさに快挙といえます。

#### メイショ

#### 日吉神社の鳥居

観世音寺裏手の小高い丘に位置する日吉神社は、江戸時代の拝殿を有し、その創建は大治 3 年（1128）とも言われる由緒ある神社です。66 段の階段を登った先にある本殿・拝殿は市指定有形文化財、神社を覆うように広がる森林は市内でも貴重な植生を有する鎮守の森として市指定天然記念物となっています。

今回注目するのは参道入口の鳥居。明治 44 年（1911）に作られた花崗岩製の鳥居には「利濟礼坤欽聖徳」「恩波四海仰福功」と大きく彫られています。石柱に刻まれた人物名に「獨掌居士拜山書」とあることから吉嗣拜山の書によるものと分かります。「獨掌居士」とは、拜山が明治 42 年に久留米梅林寺の東海猷禅師より授かった号で、拜山が晩年に用いていたものになります。

また、鳥居建設時に区長を務めた原野百太郎の功績を称える碑が鳥居のそばにあります。こちらは吉嗣鼓山が揮毫しています。吉嗣家との縁を感じさせる名所です。（木村純也）



日吉神社の鳥居

# 逸品探訪

太宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介します

吉嗣梅仙・鼓山作

## 【飲中八仙図】

出典は杜甫の詩

船に揺られるように酔って馬に乗る賀智章、参内の道すがらに麴車を見ては涎を流す汝陽、鯨が川を飲み込むほどの大酒飲み左相、酒盃をかかげて天を見上げる美少年の宗之、仏画の前で酒を飲みつつ修行のふりをする蘇晋、酒場で酔いつぶれては天子のお召しにも動じない李白、酒を三杯飲んでから書を書いて張旭、五斗の酒でようやく背筋が伸びて雄弁になる焦遂。

本作品は唐の詩人杜甫の「飲中八仙歌」を絵画化したものです。詩仙ともいわれた李白をはじめ、彼らはみな杜甫と同時代の実在の人物です。現代ではどれも大問題な逸話ですが、豪放で大らかな気分をもつものとして、詩書画の好主題となつています。

### 異なる場面を一図に集約

背景描写のない縦長の画面には、心地よくジグザグに人物が配され、8人の酒豪たちは、特徴的なモチーフやポーズとともに、



うに表現されています。絵画ならではのアレンジであり、常とう的な手法です。

### 祖父と孫のコラボレーション

逸話の豪快さとはうらはらの穏やかな雰囲気をかもし絵の作者は、本誌3号でも採り上げた吉嗣拝山の父、梅仙です。一方、上部の画賛は梅仙の孫、つまり拝山の子である鼓山が記したものです。末尾には飲中八仙歌の本文を書いて空白を埋めたと書いてあります。制作年は不詳ですが、梅仙は明治29年(1896)で世を去り、鼓山はこの時18歳だったので、賛は時を経て加えられたのかも知れません。鼓山は父拝山とも合作をおこなっており、梅仙と拝山の没後は折々に追討の書画会を催すなど、祖父と父の顕彰と供養につとめていたようです。(井形栄子)

それぞれを特定できるように描かれています。詩では個別に扱われる八仙は、画面を区切ることなく全員が同じ空間を共有しているように表現されています。



紙本着色・掛幅装

151×40.4cm

制作年不詳

吉嗣家資料

いちまい  
画稿鑑賞

## 【人物図】

齋藤家資料



紙本墨画淡彩 38.5×27.0cm

画面中央、男がひとり、地面に両膝をついています。背後に大きな柴の束がありますから樵夫でしょうか。体はやや前傾ながら、顔は上空にむけて、左手には瓢(ひょう)を握り、右手は

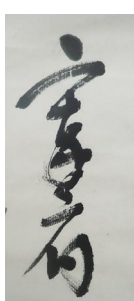
何かを受けとめるかのようにさしだしています。画面むかつて左上方にほのかにみえる五筋の淡い墨線は瀧です。

この図は、お酒を好む老父のためにいつもお酒を買いもどめていた極貧の男がお酒のわきでる霊泉を発見するという、養老瀧説話の一場面です(金井紫雲「東洋畫題綜覽」)。

養老瀧図の多くは、流れるお酒を汲むところ、時の帝の行幸の様子などが描かれます。しかし、この図は、うやうやしく天を仰ぎみる人物の姿勢、驚きと喜びをともにあらわす仕草と表情から、奇跡に遭遇した瞬間をとらえたものとわかります。この図様の選択と細部の表現は、秋圃その人に備そなわっていた、人知を超えたできごとへの畏敬の念や、敬老や孝養という慈しみの心に由来すると想像しています。(小林法子)

ひとこと  
くずし字

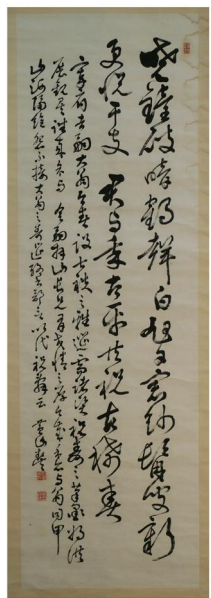
## 【宰府】



今回取り上げるのはこの広報誌のタイトル「宰府画報」の

「宰府」です。見てのとおり太宰府が省略された表現ですが、史料上では平安時代頃より「宰府」や「西府(西の都督府)」という語が使用されるようになり、江戸時代には太宰府天満に参詣することを「さいふまいり」と呼ぶようになっていました。

画像の文字を見てみましょう。「宰」は部首のウ冠はその



「福原琴道七言絶句」  
吉嗣家資料

ままですがその中の「辛」が崩れています。漢字の十と手をくっつけたようにも見えます。「府」も、部首のまだれはそのままに「付」は「内」のようになっていきます。

この資料は明治19年(1886)、備後の福原琴堂という人物が吉嗣梅仙の古稀(70歳)を祝って贈ったものです。この時、全国から絵画や書など、多くの品が吉嗣家に送られてきました。吉嗣家の幅広い交流関係を伺わせるとともに、宰府という地名が九州外でも知られていたことがわかります。(木村純也)